

研究ノート

温泉地における長期滞在の研究

——旅館経営者に対する聞き取り調査を通して——

The Research of Long Term Stay at Hot Spring Resort : A Result of Interview for Managers of Japanese Inns

浦 達 雄*

URA Tatsuo

There are seven issues to manage long term stay at hot spring resort, as a result of interview for managers of Japanese inns. These includes 'Shortage of human resources', 'Problem of vacation policy', 'Problem of serving meals', 'Time and cost', 'Aging of regular visitors', 'Refurbishment of old fashioned facilities' and 'Future direction'.

The future direction of long term stay at hot spring resort seems to be difficult. The number of 'Kashima-ryokan', a room hire style accommodation with cheap fee, is decreasing due to problem of management takeover. Even if this problem is fixed, the manager faces difficulties to continue business with restructuring. For the best solution, the accommodations should offer reasonable price, and health insurance must fill a deficit. At the moment, there is no solutions for the future. However, new style of accommodations for long term stay is increasing. It is expected to enable the new development. In recent years, international tourists attract to enjoy long term stay. This might be suggestion for the future direction.

キーワード：温泉地 (Hot spring resort)、長期滞在 (Long term Stay)、旅館 (Japanese inn)、経営者 (Manager)

1. はじめに

(1) 研究の背景

温泉地は元々湯治場（療養温泉地）として機能し、高度経済成長期で観光温泉地に方向転換をしたところが多い。その究極は熱海・伊東・別府と言った温泉観光都市の登場となった（浦 2006）。その結果、古くから湯治場として機能していた温泉地の大半が廃れ、温泉地の方向性が見えなくなってきた。そうした中で安定経済成長期以降、秘湯系・癒し系の温泉地が脚光を集め、湯治客とは違う、いわゆる観光客が入り込むことになった（服部 2012）。

本来、温泉地の機能は湯治機能であり、今風で言え

ば、長期滞在（ロングステイ）の顧客が多かった。高度経済成長期で、1泊宴会・観光型の温泉地が流行し、いまから思えば、その方向性は、温泉の機能から言えば、誤りだったかも知れない。そこで今回は「温泉地における長期滞在について」を研究テーマとして調査を進めた。持続可能な温泉地の方向性を示す場合において、温泉地としての本来のあり方や方向性を再構築することは意義深いものであると考えられる。

ここでは浦（2015）（2016 a）の調査結果の一部を引用しながら論を展開したい。

(2) 研究の目的

本研究の目的は温泉地における長期滞在の実態を探ることである。今回は旅館経営者に対して聞き取り調査を

*大阪観光大学観光学部

実施した。

(3) 研究の方法

研究の方法は旅館経営者に対する聞き取り調査である。対象とした温泉地は4ヵ所で、黒川（熊本県南小国町）・由布院・湯平（由布市）・鉄輪（別府市）となる。それぞれ1軒・1軒・1軒・2軒に対して調査を実施した。

その他では、他に別件の調査に付随する形で、肘折（山形県大蔵村）・温泉津（大田市）・美又（浜田市）・長湯（竹田市）などを調査した。

(4) 従来の研究成果

観光地理学の立場で、温泉地に関する研究は実に多い。しかし、長期滞在の研究となると、その数は少ない。日本を代表する温泉に関する学会の1つである日本温泉地域学会の研究誌「温泉地域研究」を見ると、長期滞在をテーマとする論考は存在しなかった。しかし、保養温泉地・ヘルスツーリズム・湯治場などをキーワードとする論文数は多い。

とはいえ、温泉地の長期滞在に関する最近の研究例としては、井上晶子（2014）・内田彩（2014）・内田彩・井上晶子（2015）・井上晶子・内田彩（2015）・井上晶子・内田彩（2016）・浦達雄（2015）・浦達雄（2016 a）・浦達雄（2016 b）などがある。いずれも実態調査・聞き取り調査・アンケート調査などをまとめた実証研究となっている。

2. 温泉地における長期滞在について

(1) 概要

浦達雄（2015）では、温泉観光実践士養成講座（大阪）（2015年6月27・28日開催）（温泉観光実践士養成講座実行委員会2015）の際の修了レポートで、温泉地の長期滞在に関するアンケートを実施し、その結果、62人に及ぶ枚数を回収した。

主な調査項目は長期滞在の日数（理想と現実）、その際の必要施設、活動内容、理想と現実の間にある問題点・課題などである。回答者は温泉マニア（社会人）が大半で、4人が学生（その内3人が留学生）であった。温泉マニアとは言え、温泉地に向かう回数は一般の方よりも多い上に温泉に関する造詣も深く、温泉の正しい理解と温泉地の活性化に対して真摯に向き合う方が多い。

(2) 調査結果

調査結果は、次の9点に集約されよう。

- ①時間の問題
- ②費用の問題
- ③企業や国の休暇制度
- ④自炊や外食の対応
- ⑤温泉+α
- ⑥滞在メニュー
- ⑦宿泊施設の多様化
- ⑧スロートーリズムやフードツーリズム
- ⑨国民保養温泉地制度

3. 温泉地における長期滞在の問題点と課題

(1) 概要

浦達雄（2016 a）では、アンケート形式の聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は日本温泉地域学会の研究発表会の場（2014年11月9日と10日、2015年5月17日と18日）で実施した。その場で記入してもらった上で聞き取り調査をする手法である。その後メールにて補足調査を行い、調査完了となった。

調査対象者は10人で、その内訳は大学の研究者4人・在野の研究者2人・温泉ライター（含む温泉マニア）4人となる。

調査項目は、①最近の宿泊客（観光客）の動向 ②長期滞在者の動向 ③長期滞在をすすめる際の問題点と課題 ④その他 となる。

(2) 調査結果

調査結果は次の8点に整理出来よう。

- ①滞在パターン
- ②滞在制度の充実
- ③着地型旅行商品の充実
- ④ミニ湯治（新湯治）のススメ
- ⑤専門ディレクターの確保
- ⑥環境の整備
- ⑦宿泊施設の充実
- ⑧高齢者の健康生活

4. 調査旅館の概要

(1) ふもと旅館（熊本県黒川温泉）

黒川は高度経済成長期に観光化が進んで、湯治機能が停滞したが、現在、インバウンドを主体として数泊だ

が、長期滞在の傾向が見られる。特に、韓国人は山野を歩く傾向にあり、自らオルレ（いわばトレッキング）を実践している。

ふもと旅館の主人は、入湯手形を提案した人物として知られる。旅館の開業は 1955 年（買収）で、部屋数は 14 室（和室 11・和洋室 2・洋室 1）を数える。収容人員は 55 人～60 人で、経営形態は和風旅館（1 泊 2 食）となる。宿泊料金（1 泊 2 食）（税別）（2 人で 1 部屋利用。以下、同じ）は通常期 1.3 万円から 2.0 万円に設定している。別館として高品位旅館のこの湯を運営している。

長期滞在については 2 泊程度の連泊は存在するが、4 日から 5 泊となるとごく稀である。

黒川の場合、B&B の形態は少ない。夕飯の場所が問題となるからだ。長期滞在を進めるには、国の政策としての全体的な休暇制度に問題があるのでは、と指摘する。

(2) はな村（由布市由布院温泉）

由布院は戦前までは奥別府と言われ、別府の奥座敷的な存在だった。しかし、高度経済成長期に観光化が進展し、安定経済成長期以降、女性に優しい温泉地として人気を博している。

はな村は由布院人気の湯の坪街道に面し、開業は 1998 年、別府の翼リゾートが不振店を買収して開業した。現在の客室は 29 室、収容人員は 99 人を数える。経営形態は和風旅館（1 泊 2 食）で、高品位旅館として知られる。宿泊料金（1 泊 2 食）は通常期 1.9 万円から 2.85 万円に設定している。

高品位旅館なので、長期滞在は少ない。由布院らしく女性に優しい温泉旅館を目指し、顧客感動を迫している。

(3) 旅館志美津（由布市湯平温泉）

湯平は古くから湯治場（療養温泉地）として知られる。しかし、由布院の観光化と共に湯平も湯治機能が停滞し、観光化が進んでいる。

志美津は湯平を代表する老舗旅館として知られる。開業は 1926（大正 15）年で、清水酒造の副業として旅館経営を始めた。1958 年、有限会社志美津を設立し、屋号を「志美津」と定めた。

現在の部屋数は 9 室で、収容人員は 36 人を数える。経営形態は和風旅館（1 泊 2 食）となる。宿泊料金（1 泊 2 食）は通常期 1.2 万円から 1.8 万円に設定してい

る。

長期滞在については連泊はあるが、長期滞在はない。宿泊客の傾向として、ここ数年インバウンドが増加しており、1 日当たり数組が宿泊している。

湯平での B&B は夕飯を食べる場所が少ないので現状では厳しい。現在、貸間旅館は 1 軒に留まっており、湯治機能の停滞が著しい。

(4) 双葉荘（別府市鉄輪温泉）

鉄輪は長い間湯治場（療養温泉地）として機能し、九州を代表する湯治場として知られた。

双葉荘（写真 1）は鉄輪を代表する貸間（湯治）旅館で、開業は 1941（昭和 16）年、大分県を代表する力士・双葉山の名前を使用した。開業理由は親戚が経営する貸間旅館が満館となったため、それを補完する形で開業となった。

現在の客室は 25 室で、収容人員は 60 人を数える。経営形態は貸間旅館（賄い無し）で、宿泊客は自分で地獄蒸し料理などを楽しむことになる。宿泊料金は 3,500 円となる。

長期滞在については高齢化で顧客が減少傾向にある。最近の傾向として、身体的な癒しよりも精神的な癒し（気分転換・ストレスの解消など）を求める宿泊客が増えている。

鉄輪では明治初期開業の老舗の中野屋が廃業し、現在、貸間旅館は陽光荘と双葉荘だけになった。その他の貸間旅館の一部は和風旅館に転換し、食事付で新境地を開拓している。

(5) 温泉閣（別府市鉄輪温泉）

温泉閣は 1884（明治 17）年、温泉山永福寺の宿坊として開業した。鉄輪で現存する旅館の中では老舗の 1 つに数えられる。現在の部屋数は 10 室、収容人員は 25 人を数える。経営形態は和風旅館（1 泊 2 食）で、主人（オーナーシェフ）による料理旅館として知られる。宿泊料金（1 泊 2 食）は通常期 0.75 万円から 1.3 万円に設定している。

長期滞在については高齢化で顧客が減少傾向にある。しかし、手頃な宿泊価格であるため、料理を求める宿泊客が増えてきた。ユニークな例として、癒しと休養を求める企業の社長や管理職などが顧客となった。外国人の場合、原則 B&B だが、最近では、夕飯（和食）を楽しむ傾向にある。彼らは自分で活動を見出して、山登りやハイキングなどを行っている。

温泉閣は貸間旅館から和風旅館へ方向転換した成功例で、源泉旅館としても知られる。

(6) 大丸旅館（竹田市長湯温泉）

大丸旅館は長湯を代表する老舗旅館として知られる。開業は1919（大正8）年で、部屋数は14室（和室11・洋室3）、収容人員は60人を数える。経営形態は和風旅館（1泊2食）となる。宿泊料金（1泊2食）は通常期1.32万円から2.42万円に設定している。

ところで、大丸旅館は支店として、2008年、B・B・C長湯を開業した（写真2）。BBCとは、Bed、Breakfast、Cultureで、特色は長期滞在施設と林の中の小さな図書館となる。部屋数は6室、収容人員は15人を数える。経営形態はB&B（1泊朝食付）で、宿泊料金（1泊朝食付）は4,536円から8,640円に設定し、連泊になれば、料金の引き下げがある。

B・B・C長湯は新しいタイプの湯治宿を意図して、時代に先駆けて開業したものである。当初、経営者・宿泊客共に戸惑いがあったが、現在ではその価値が認められている。カルチャーの充実を図り、敷地内の図書館では主に野口冬人の図書を収蔵し、宿泊客の閲覧が可能である。連泊は予定より少ないが、主な客層は若いカップルや女性同士の利用が多い。

大丸旅館では日帰り温泉としてラムネ温泉を経営しており、トータルな中で長期滞在を進めている。

(7) 輝雲荘（大田市温泉津温泉）

輝雲荘は温泉津を代表する老舗旅館である。開業は1944（昭和19）年で、現在の部屋数は14室、収容人員は54人を数える。経営形態は和風旅館（1泊2食）で、宿泊料金（1泊2食）は1.2万円から2.0万円に設定する。

輝雲荘は長期滞在を意識して、別邸（静仙館）（2013年）・法泉長屋（2015年）（写真3）を整備した。前者は1階8畳間・ダイニング・キッチン・バス付・2階8畳、後者は1階6畳間・ダイニング・キッチン・シャワー付・2階6畳となる。

宿泊料金（1人当たり。素泊まり）（5人以上の場合）、前者は6,000円、後者は5,000円となる。

両者共に長期滞在を意識して整備し、古民家の再生に意味がある。清潔で快適な空間を提供しており、新しいタイプの湯治宿と言えよう。宿泊客は家族連れ、グループ客などだが、利用は連泊に留まっている。

現在の温泉津は、地域全体でヘルスツーリズムに取り

組んでおり、推進組織として温泉津ヘルスツーリズム協議会がある。おはようウォーキング、健康ウォーキングを実施しており、まさに長期滞在を先取りしている。

5. まとめ

以上のように、聞き取り調査の結果を報告したが、以下、その他の聞き取り調査の結果などを合わせて、まとめとしたい。

①後継者不足

後継者不足の指摘が多かった。事業を継承する場合、生業としては出来るが、企業としての経営は出来ない。

②休暇制度の問題

現在の休暇制度はネックである。GW・夏休み・SW・年末年始に休暇が集中しており、長期休暇の取得は難しい。

③料理の問題

貸間旅館の場合は、賄い無しで、宿泊客が食べ物を自分で調達するが、和風旅館となると、連泊の食事対応は難しい。

④時間と費用

長期滞在となると、時間と費用が問題となる。貸間旅館の場合、1泊3,500円として、6日間で21,000円となり、年数回の長期滞在は難しい。

⑤常連客の高齢化

貸間旅館の場合、常連客が高齢化し、客足の減少につながっている。親子孫の世代まで繋がることはまれなことで、新規の顧客の獲得は難しい。

⑥旧態依然とした施設の克服

貸間旅館と言えば、古臭い客室を思い浮かべるが、これはこれで存在価値は大きい。リーズナブルな宿泊料金で、設備投資額を顧客に転化することは無理な話である。鉄輪で聞き取りを行った旅館はいずれも自家源泉を所有しており、温泉そのものに魅力がある。しかし、ネット世代の若者を顧客に迎える場合は、その対応は難しく、特にネット予約の顧客に対して神経を注いでいる。

⑦今後の方向性

温泉地における長期滞在の方向性は実に厳しい。リーズナブルな貸間旅館は後継者不足もあって減少しており、事業継承・構築の立場になると、さらに厳しい。

長期滞在の場合、誰もが安くて手頃な宿泊料金を旅館サイドで設定し、適正価格との差額は、健康保険で賄うという仕組みは最良だと個人的に考える。しかし、現状では実に難しいと思われる。

【付記】

本研究は、「研究種目 (基盤研究 C)、研究課題 (温泉地における長期滞在モデルの構築に関する研究) 代表者 内田彩 課題番号: 26360085」による研究成果の一部である。

なお、本報告は「温泉地における長期滞在の研究」(日本観光学会 (2016 年 6 月 11 日口頭発表) の一部である。

写真は紙面の都合上、巻末にまとめ、双葉荘 (写真 1)・B・B・C 長湯 (写真 2)・法泉長屋 (輝雲荘) (写真 3) のみ掲載することにした。

撮影者及び撮影時期は双葉荘 (浦達雄、2014 年 7 月撮影)・B・B・C 長湯 (大丸旅館、2016 年 9 月撮影)、法泉長屋 (浦達雄、2015 年 9 月撮影) となる。

【参考文献】

井上晶子 (2014) 「温泉地における滞在に関する研究 (1) - 『滞在』 についての一考察 -」 日本温泉地域学会第 24 回研究発表大会要旨集、5~6 頁。(査読無)

内田彩 (2014) 「温泉地における滞在に関する研究 (2) - 宿泊施設による魅力ある滞在にむけての試み -」 日本温泉地域学会第 24 回研究発表大会要旨集、7~8 頁。(査読無)

内田彩・井上晶子 (2015) 「温泉地における滞在型への取り組み」 日本国際観光学会 第 19 回全国大会発表論集、70~71 頁。(査読無)

井上晶子・内田彩 (2015) 「温泉地の滞在に関するイメージを巡って」 日本国際観光学会 第 19 回全国大会発表論集、68~69 頁。(査読無)

井上晶子・内田彩 (2016) 「温泉地の魅力ある滞在構造の形成に関する研究」 日本国際観光学会論文集 (第 23 号)、20~38 頁。(査読有)

浦達雄 (2006) 『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』 クリエイト、218 頁。

浦達雄 (2015) 「温泉地における長期滞在について」 観光研究論集 (大阪観光大学観光学研究所・年報)・第 14 号、59~64 頁。(査読無)

浦達雄 (2016 a) 「温泉地における長期滞在の問題点と課題」 大阪観光大学紀要・第 16 号、65~70 頁。(査読無)

浦達雄 (2016 b) 「温泉地における長期滞在の研究」 日本観光学会第 109 回全国大会プログラム・研究発表要旨集、28~29 頁。(査読無)

温泉観光実践士養成講座実行委員会 (2016) 『温泉の正しい理解と温泉地の活性化 - 第 7 改定版 -』 温泉観光実践士養成講座実行委員会、118 頁。

布山裕一 (2009) 『温泉観光の実証的研究』 お茶の水書房、339 頁。

服部銈二郎編著 (2012) 『現代日本の地域研究』 古今書院、189 頁。

写真 1 双葉荘 (別府市鉄輪温泉)

玄関先



客室



内湯



地獄蒸し



写真2 B・B・C長湯（大丸旅館）（竹田市長湯温泉）

敷地



客室



図書館



朝食



写真3 法泉長屋（輝雲荘）（大田市温泉津温泉）

玄関先



客室



キッチン



露天風呂（輝雲荘）

